

苦言ばかりで申訳なかった

古井喜実

親愛の情をこめて、「大平君」といわせていただく。昭和十八年だったと思う。私が茨城県知事を務めていたころ、池田勇人君が水戸にやってきた。どこかで飲んでいて、やってこいという。「そんなケチなところで飲まずに、こつちにこい」というのだが、もはや、少々回っていて、聞かない。行ってみると、税務関係のとりまきがついて、そのなかに大平君がいた。一見、順良そうな青年官吏で、後日大物政治家になる、したたか者にはみえなかった。これが知り合いの初めである。安心して付き合つて深入りし、とうとう相許す仲となった。

大平君は長上に仕えるのが得手で、賀屋興宣氏のような面倒な人も、彼には丸め込まれた。人のよい池田などたやすい方だったろう。頭が粗くて（大平君の言葉）、目の離せない池田をよくお守りをし、よい総理にしてくれた第一の功労者は大平君であったことは、衆目の一致するところである。

仕え上手の反面、下の者を率いるのは不得手だった。警察署長でも駅長でも、人を使う苦勞をした者と、秘書官育ちとは、そこが違う。それに、大平君は頭が緻密、性格は内気で用心深く、かつ表現能力はＣクラスであった。歌も唄えず絵も描けず、はったり一言いえず、ため、どれだけ損をしたか判らぬ。何とか直せないものかとたびたび忠告し、度を越して喧嘩別れになりかかったこともある。

昭和三十九年秋、池田総理ががんセンターで駄目だと宣告されたとき、大平君が私の習字の稽古場にやってきて、人を払い、どうしたものかという。やめさせる一手しかないではないか。誰が引導を渡すか。病名はいえな

いし、鼻っ柱の強い相手である。前尾君の役目だが、そのとき大平君は、やはりこの役は自分が引き受けるという。一度や二度では駄目だぞという、何回でも行くところまでやるという。とうとう、その通りにやった。いやな仕事を逃げようとする人間であった。このとき、この男はただものでないと、心のなかで畏敬した。

もつといやな仕事をやったのを知っている。池田なぎあとを継いだ前尾君に対し、あきたらない空気が派閥の内外に起った。前尾君は、お坊さんか教育者の社会なら極上の人物だが、政界はそんな立派な場所ではない。そこで、何とかならぬかと、よけいなことだが、私も前尾君の家に向いて愚見を述べたこともある。反対だともいわぬが、のれんに腕押しである。大平君は、しょせんこの仕事は自分でやるほかない。何力月かかっても自分でやるという。これには驚き、かつ感心した。やめるも愉快な話でないが、その上、自分によこせはいちばんいやな話である。決して、私心だけでやれる仕事でない。

田中内閣ができたとき、大平派の大勢は大平君に幹事長をやれという。私は、とんでもない。泥をかぶる覚悟で日中復交という歴史的事業に取り組めと強硬に進言した。それがあらぬか、彼はやってくれた。大きな決断したのは田中総理であり、このときの彼の態度は棟梁として実に立派なものだったが、ねばり強く綿密にことを運んだのは大平君であった。私も、このときこそ毎日のように山王ビルの事務所まで彼と会って、ありたけの知恵をかした。田中・大平のコンビがなかったら、当時、日中問題はどうなっていたか判らぬ。

大平君は口下手で、お世辞一ついえなかった。しかし、彼は本物だった。誠意があった。他人や日本を裏切ることはできなかった。ここが彼の真骨頂であり、人間として尊いと思う。彼は他人を責めることができないで、自分を責めた。そのため苦勞ばかりして一生を終わった。末期は、ありあり疲れていた。気の毒な人である。彼の考え込んだ姿が目の前に浮かび、目がうるんでくる。

(衆議院議員・第一次大平内閣法務大臣)